

日時 | 2月14日(金) 17-20時 (青花会員と御同伴者のみ)
2月15日(土) 11-20時
2月16日(日) 11-17時
会場 | BOOTLEG gallery (神楽坂/江戸川橋)
見料 | 500円 (青花会員は無料)

「生活工芸」以後の工芸

監修 | 松本武明 (ギャラリーうつわノート)

山内彩子 (Gallery SU)

出展 | ギャラリーうつわノート (埼玉) 翫粹 (京都) 水犀 (東京) cite (広島)

GALLERY crossing (岐阜) Gallery NAO MASAKI (愛知) Gallery SU (東京)

NOTA_SHOP (滋賀) OUTBOUND (東京) pragmata (東京)

SHOP & GALLERY YDS (京都) toripie (京都/大阪)

主催 | 新潮社青花の会

対談1 | 赤木明登 (塗師) + 高木崇雄 (工芸史家)

2月15日(土) 13-15時 於工芸青花 (神楽坂)

対談2 | 沢山遼 (美術批評家) + 保坂健二郎 (東京国立近代美術館主任研究員)

2月16日(日) 13-15時 於工芸青花

申込み | www.koge-seika.jp

青花の会では毎年6月に「骨董祭」と称して、各地の骨董商がどうも僱事をおこなっているのですが、このたびあらたに「工芸祭」として、現代工芸のギャラリーの会を開催することになりました。今回のテーマは『生活工芸』以後の工芸』です。

「工芸」の定義は、私はひとまず「ヒトの手によりつくられた道具」としてしています。「生活工芸」については、監修者である松本さん、山内さんがこのチラシの文中で説明しているので、ここではふれません。

工芸祭をはじめの理由の大ききには、工芸について考えることは、時代／社会／人間について考えること、という思いがあります（そのくらい、工芸は人間にとって本質的なことと考えています。「生活工芸」以後の工芸、とは、いいかえれば「これからの工芸」という意味です（それは「生活工芸」を、ここ20年ほどの手工芸史で重要な動向だったとみなす私の考えによるものです）。

「これからの工芸」を考えることは、人間という「不易」と、この時代／社会という「流行」の両方を考えることになると思います。今回の工芸祭で、私が出展者のみなさんに期待しているのは、現代のすぐれた工芸家がつくりだすものに予兆的にあらわれているはずの「いま／これから」性を、作家自身よりも明敏に観取し、概念化し、解説してもらえたら、ということなのです（それがギャラリーの大事な役割では、とも考えています）。

うつわノートの松本さん、Gallery SUの山内さんに監修（出展者の選定等）を依頼した理由は、上記のような「ギャラリーの役割」をすでに自覚的にはたしているふたりだからです。

（菅野康晴／『工芸青花』編集長）

1990年代に発して2000年頃から顕著になった暮らしの道具（生活工芸）ブームは、ライフスタイル系ショップ（生活用品店）を中心に、工芸品を生活に同化させる役割を果たしました。従来の美術工芸品のように構えて接するものではなく、衣服や音楽などと同様、暮らしの中で景色化し、裾野を大きく広げました。私見ですが、それは明治以来特殊化されてきた「美」（工芸に限らず）を、日常というステージに解放し、再生させるムーブメントであったと思います。工芸品は本来そういうものであろうと思うのですが、意外にも、当たり前のことがそうではなかったのですから、この30年間の出来事は特筆すべき変化（パラダイムシフト）であったと言えるでしょう。

そうした傾向は今もSNSなどを通じて拡散し、当初とはまた違った様相を呈しています。誰にでも広く届く利点はある一方、ファストファッション化とも言い得る状況でもあるように思います。大いなる自由を得たかわりに、批評性を失い、歴史と接続し得る骨格を失ってしまった。それはまるで、「民藝」運動が後年になって「民芸品」の名のもとに土産物に墮し、商業的には成功したものの、本来の思想とは乖離してしまった過去と重ねることが出来るかもしれません。

もし、この30年の生活文化の変化の起点が「生活工芸」にあるならば、その延長線上にある現在、工芸に何が起きているのか。ネットによる直接取引が可能な時代です。ギャラリーという仲介業の役割が相対的に減少するなか、新たなプレイヤー（ギャラリー）は何を考え、それを

どのように伝えようとしているのか、あらためて考える機会も必要だと思えます。「工芸祭」は比較的キャリアの浅い12軒のギャラリーによる僱事ですから、現況の全体像を示すことは無理にしても、この時代のある断面は現れるはずで、単なる展示販売会ではなく、時代の鏡として、この「工芸祭」が記憶されることを願っています。

（松本武明／ギャラリーうつわノート）

30年ほど前に始まり、2000年代に根づいた「生活工芸」という潮流。「生活工芸派」とされる5人の作家（赤木明登、安藤雅信、内田鋼一、辻和美、三谷龍二）の人氣は、従来なら工芸に興味を持たなかった層にまで広がりました。そのブームは現在にいたるまで、功罪両面にわたり影響を残しています。

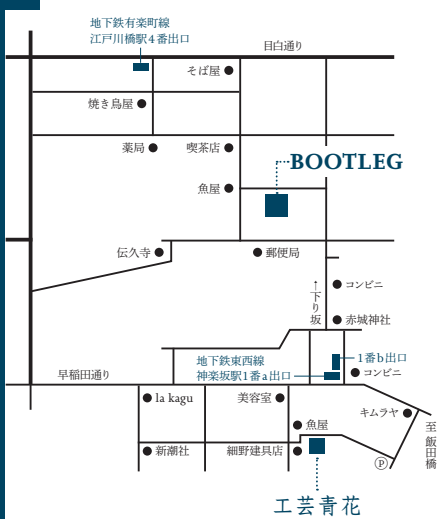
「功」は、工芸の世界をより一般に開かれたものとし、後続世代の作家の活動の場を広げたこと。そして「罪」は、人氣作家の個展になると行列ができて作品の奪い合いになるような、作家のブランド化をもたらししたこと（SNSの普及によりさらに加速しました）。

そうした「罪」の現象は、消費のサイクルを遅くする生活工芸（安藤雅信）といった作家の意図に反して生じたことなので、彼らのせいではないのかもしれませんが、しかし、彼らのような人氣作家に頼り、新たな作家を見出し育てる努力を怠ってきた、一部のギャラリーには責任があります。

2010年以降の工芸界は、シンプルで無地の日用の器を主とする生活工芸からの揺り戻しのように、用途から離れた造形作品や、装飾的・技巧的な器など、様々な流れが生まれてきます。そうした豊かな多様性を維持できるかどうかは、ギャラリーと作家が、一時的な流行に左右されず、各々の道を切り拓いていくことができるかにかかっています。

現在は過渡期。「青花の会／工芸祭」には、信念をもって2020年以降へ進もうとしているギャラリーが集います。ご来場下さる皆様も、この時代の工芸とギャラリーを取り巻く状況を作り出す当事者として立ち会って頂ければ幸いです。

（山内彩子／Gallery SU）



BOOTLEG

東京都新宿区改代町40
江戸川橋駅より徒歩5分/
神楽坂駅より徒歩7分

工芸青花

東京都新宿区横寺町31-13 一水寮101
神楽坂駅より徒歩2分